

アバール語における名詞を 修飾していない形容詞的分詞*

山田久就

1. はじめに

平叙文の主節の述語動詞（本論文では節の主要部である動詞を意味する）で一般的に使われる動詞の変化形を定形と呼ぶと、アバール語の例である(1)では、述語動詞は定形をしている。

- (1) Zairaca kağat c'al-ana.
 Zaira.ERG 手紙.ABS 読む-PST
 「Zairaが手紙を読んだ」[RG-G, p.47]

アバール語は、ロシア連邦ダゲスタン共和国を中心に、コーカサス（カフカ

* 標準アバール語の文語で用いられている文字はキリル文字であるが、本稿では、ラテン文字へ次のような転写を行って、標準アバール語を表記している。a=a, б=b, в=w, г=g, гъ=g̃, гь=h, гI=ç, д=d, е=e, ж=ž, з=z, и=i, й=j, к=k, къ=q', кь=k', кI=k', л=l, лъ=l̃, м=m, н=n, о=o, п=p, р=r, с=s, т=t, тI=t', у=u, ф=f, х=x, хь=q, хь=ç, хI=h, ц=c, цI=c', ч=ç, чI=ç', ш=š, ш=šš, э=è, ю=ju, я=ja, ъ='。アバール語で使われているキリル文字のラテン文字への転写には標準的な方法が確立しておらず、ここでの転写法は筆者独自のものであることをお断りしておく。本稿で用いる省略記号は次の通りである。ABS: absolutive(絶対格); AM: agreement marker(一致標識); CAUS: causative(使役); DAT: dative(与格); EM: emotional particle(感嘆詞); ERG: ergative(能格); FUT: future(未来時制); GEN: genitive(属格); GNL: general(一般時制); LAT: lative(向格); LOC: locative(位格); M: masculine(男性); NH: non-human(非人間); PL: plural(複数); PRS: present(現在時制); PCONV: perfect verb(完了副動詞); PRT: participle(形容詞的分詞); PST: past(過去時制); QUO: quotation marker(引用標識)。アバール語の位格、向格はそれぞれ5系列から成っていて、位格、向格の後ろの数字は、その系列を表す。

ス) 地方の北東部で話されていて、ダゲスタン諸語(北東コーカサス諸語とも呼ばれる)の一つである。アバル語の動詞の定形には時制の区別がある。具体的には、存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」以外の動詞では過去時制、一般時制、未来時制の区別があり、存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」ではさらに四つ目の現在時制が加わる¹。

名詞を修飾する際に使われる動詞の変化形を形容詞的分詞形と呼ぶことにするが、アバル語では、主節の述語動詞が、定形ではなく、形容詞的分詞形で現れることがある(Bokarev, 1949:69-80, Nurmagomedov, 1992:174-178, Mustafaeva, 1995:35-40, Xalikov, 1997:164-170, Aligadzhieva, 2008:143-146, Dzhamaludinova, 2010:110-113)。(2)がその例である。

- (2) Ššib kk-ara-b?
 何.ABS 起こる-PRT.PST-NH
 「何が起きたの？」[MP2-K, p.48]

アバル語の動詞の形容詞的分詞形も定形と同様に時制で区別される。

アバル語の動詞の定形は従属節ではあまり使われない。ab-ize「言う」やkk-eze「思う」などに埋め込まれる従属節で日本語の「～と」に対応する引用標識-(j)an, -(j)ilan, -(j)inなどを後続して現れるのが全てである。一方、形容詞的分詞形はどうであろうか。アバル語の動詞はいろいろな非定形を持っている。ある非定形は動詞の語幹に接辞を付けて作られるが、別の非定形はすでにある定形や非定形の形に接辞等がさらに付いて作られる。本稿では、述語動詞が形容詞的分詞形をしている場合について問題にするが、形容詞的分詞形に接辞等が付いてできた別の非定形は議論から除外する。た

¹ 過去時制形は二種類ある。一つ目は語幹に接辞が付いた形であるが、二番目は一般時制形および現在時制形に-anが付いてできた形である。未来時制形も二種類ある。一つ目は、語幹に接辞が付いた形であるが、二番目は不定形と存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」の現在形からなる複合動詞である。

たとえば、過去時制の形容詞的分詞形に-goがついて、「～すると」を意味する副動詞が作られたり、いろいろな時制の形容詞的分詞形に-tiがついて「～したこと／すること」を意味する従属節が作られたりするが、このような従属節は扱わない。本稿の目的は、アバール語の形容詞的分詞形が単独で（接辞が後続したり、助動詞と複合したりしないで）使われる環境を明らかにすることである。

2. 主節

主節の述語動詞が形容詞的分詞形をしているのは疑問文に多い。そこで、疑問文から始めることにする。

2.1 疑問文

疑問文には、疑問詞を含み、その疑問詞の箇所を答えてもらう疑問文と疑問詞を含まず、「はい」か「いいえ」で答えてもらう疑問文があるが、疑問詞を含む疑問文から疑問詞を含まない疑問文へ話を進めていく。

アバール語において、疑問詞を使った疑問文の述語動詞は、一般的に、定形で現れることはなく、先に示した(2)のように、形容詞的分詞形となる (Mustafaeva, 1995:36, Aligadzhieva, 2008:145-146)。ただし、反実仮想の条件文の主節は例外である。反実仮想の条件文の主節が平叙文である場合の述語動詞は未来時制の定形+-anで作られ、時制での区別はない。一方、疑問文では、(3)のように、未来時制の形容詞的分詞形+-anが使われている例もあるが、(4)のように、平叙文と同様に、未来時制の定形+-anが用いられていることが多い。

- (3) ššib-in ab-ile-b-an Ğadamaz
 何.ABS-QUO 言う-PRT.FUT-NH-an 人.PL.ERG
 dun-gi t'ur-arajani.
 私.ABS-も 逃げる-ならば
 「私も逃げていたら人々は何と言ったでしょうか？」 [ShM2-K, p.241]
- (4) Ššib har-ila-an duca Dağistanañul xalq'ale?
 何.ABS 頼む-FUT-an あなた.ERG ダゲスタン.GEN 民衆.DAT
 「あなたはダゲスタンの民衆に何を頼んだのでしょうか？」 [DG-D, p.134]

反実仮定の条件文の主節以外で疑問詞を含む疑問文の主節の述語動詞が定形をしている例は、筆者は、今の所、見つけていない。

次に、疑問詞を伴わない疑問文に話を移す。アバール語の疑問詞を伴わない疑問文では、一般的には、-(j)ishsh (Saidov, 1967:782, Madiev, 1981:141) か-daj (Saidov, 1967:782, Madiev, 1981:141) が何らかの単語の後ろに付けられる。-(j)ishshは述語動詞に付くこともあれば、それ以外の単語に付くこともある (Alelseev & Ataev, 1998:88-89, Aduxova, 2011:108-109)。また、-dajも述語動詞に付くこともあれば、それ以外の単語に付くこともある (Alelseev & Ataev, 1998:88, 91, Surxaeva, 2007:107-108)。-(j)ishshや-dajが述語動詞以外の単語に付いている場合、その単語（あるいはその単語を含む句などの塊）が疑問の焦点になっている。(5)は-(j)ishshが述語動詞以外の単語に付いている例である。

- (5) Mun rik'k'adasa-jišš w-ač'-ara-w?
 あなた.ABS 遠くから-(j)ishsh M-来る-PRT.PST-M
 「あなたが来たのは遠くからですか？」 [ShM1-C, p.125]

-(j)ishshが述語動詞以外に付いている場合、述語動詞は、一般的に、形容詞的分詞形をしている。ただし、疑問詞を含む疑問文と同様に、反実仮定の条

件文の主節では、例外的に定形になることもある。例文は省略する。

先に述べたように、述語動詞に-(j)ishshが付くこともあるが、この場合、述語動詞は定形をしていることもあれば、形容詞的分詞形をしていることもある (Mustafaeva, 1995:36-37, Alelseev & Ataev, 1998:88, Mallaeva, 2002:34, Mallaeva, 2007:75-76)。(6)が定形の例であり、(7)が形容詞的分詞形の例である。

- (6) Mun bož-an-išš?
あなた.ABS 信じる-PST-(j)ishsh
「あなたは信じたのですか？」 [ShM1-C, p.122]
- (7) Mun ħimalazuqe ššw-ara-w-išš?
あなた.ABS こども.PL.LAT2 着く-PRT.PST-M-(j)ishsh
「あなたは子供達のところに行ってきたのですか？」 [MP2-K, p.175]

次に-dajについて述べる。(8)と(9)は述語動詞以外の単語に-dajが付いている例である。

- (8) hesda cebe gazeta-daj b-uge-b-ilan
彼.LOC1 前に 新聞.ABS-daj NH-PRT.PRS-NH-QUO
「彼の前にあったのは新聞ですかと...」 [RG-G, p.52]
- (9) Zahidatica-daj ħ-una?
Zahidat.ERG-daj 与える.PST
「[...]をくれたのはZahidatですか？」 [MM-G, p.232]

述語動詞は、(8)では形容詞的分詞形であるのに対して、(9)では定形である。このように、述語動詞以外の単語に-dajが付いている場合、-(j)ishshとは違って、述語動詞は定形のこともあるし、形容詞的分詞形のこともある。-dajが述語動詞についている場合も同様で、(10)のように述語動詞が定形をしていることも、(11)のように形容詞的分詞形をしていることもある。

- (10) Asjade hew w-ağ-ana-daj?
Asya.LAT2 彼.ABS M-しかる-PST-daj
「Asyaを彼はしかったのですか？」 [RG-G, p.51]
- (11) w-oġ-ule-w-daj haġie dow
M-好いている-PRT.GNL-M-daj この女性.DAT あの男性.ABS
「この女性はあの男性を好いているのですか？」 [ShM2-K, p.195]

上に挙げた(8), (9)では, -dajは普通の名詞に付属しているが, (12)のように, 疑問詞の後に-dajが付いていることもある (Aleseev & Ataev, 1998:88)。

- (12) Ššib-daj kk-ara-b?
何.ABS-daj 起こる-PRT.PST-NH
「何が起こったのですか？」 [RG-G, p.63]

疑問詞の後に-dajが付いている場合は, 疑問詞の後に-dajが付いていない場合と同様に, 述語動詞は, 一般的に, 形容詞的分詞形になる。一方, -(j)ishshが疑問詞の後に付いている例は見つかっていない。この他, 疑問詞を伴う疑問文で, 述語動詞に-dajが付いている文は見つかっていないし, 疑問詞を伴う疑問文で, 述語動詞に-(j)ishshが付いている文も同様である。また, -(j)ishshの直後に-dajが付いていたり, -dajの直後に-(j)ishshが付いていた例も見つかっていない。さらに, -(j)ishshが述語動詞以外に付いていて, 述語動詞に-dajが付いている文や, -dajが述語動詞以外について, 述語動詞に-(j)ishshが付いている文も見つかっていない。

2.2 平叙文

平叙文には肯定文と否定文があるが, 肯定文より否定文においての方が形容詞的分詞形の述語動詞が使われていることが多い。否定文で述語動詞が形容詞的分詞形になっている文は主に部分否定を表す否定文である。そこで,

先に、部分否定を表す否定文について述べ、その後で肯定文と部分否定以外の否定文について述べていく。

2.2.1 部分否定

アバール語で部分否定を表すにはguroを用いる (Aleseev & Ataev, 1998: 79, Aduxova, 2011:108-109)。部分否定をする単語, すなわち, 部分否定の焦点となる単語の直後にguroを置く。(13)がその例であるが, 与格名詞の直後にguroが現れていて, 与格名詞が部分否定の焦点になっている。

- (13) Dica due guro salam f'-ura-b,
私.ERG あなた.DAT guro 挨拶.ABS 与える-PRT.PST-NH
「私が挨拶をしたのはあなたへではありません。」 [XX-I, p.239]

guroを含む文の主節の述語動詞は一般的に形容詞的分詞形になる。参考のために述べておくと, guroは述語動詞の後に置かれることはない。

guroから作られた単語にgure-AMがある。gure-AMは, 「～ではない～(名詞)」と名詞を修飾する場合に使われるが, (14)のように, 「Aでなく, B」の「～ではなく」を表すためにも使われる。

- (14) Co nuxaŋ gure-b, k'igo nuxaŋ har-ana dica
1 回.ERG gure-NH 2 回.ERG 頼む-PST 私.ERG
「私が頼んだのは一回ではなく二回です。」 [ShM2-K, p.168]

(14)では, 述語動詞が定形であり, gure-AMの後に「Aでなく, B」のBがある場合は, 述語動詞の形式は「AではなくB」のBに従って決まり, (14)では, Bが普通の名詞で述語動詞を形容詞的分詞にする要因となるものが後続していないので, 述語動詞は定形をしている。

一般的ではないと言えるかもしれないが, gure-AMが「AではなくB」

のBを伴わず, guroのように部分否定として使われることもある。(15)がその例である。

- (15) Guržijazul režisserase
 ジョージア人.PL.GEN 監督.DAT
 hik'aw xudožnik gure-w hažat w-uk'-ara-w,
 良い 芸術家.ABS gure-M 必要な M-いる-PRT.PST-M
 「グルジア人達の監督に必要なのは良い芸術家ではなかった。」
 [DJu-A, p.340]

gure-AMがguroのように部分否定として使われている場合には, 述語動詞は一般的に形容詞的分詞形になる。

2. 2. 2 部分否定を表している否定文以外の平叙文

アバール語には叙述の焦点となる単語に付加される従属形態素があり, それは-(j)inである (Madieva, 1981:142)。(16)では, 動作主として機能している能格名詞に-(j)inが付いていて, その名詞が叙述の焦点となっている。

- (16) Dos-in dida heb rak'aldego ššwez-a-b-ura-b..
 あの男.ERG-in 私.LOC1 これ.ABS 思い出す-CAUS-NH-PRT.PST-NH
 「私にこれを思い出させたのはあの男性です。」 [MM-G, p.183]

-(j)inを含む文の主節の述語動詞は一般的に形容詞的分詞形となる。

-(j)inは形容詞的分詞をしている述語動詞に付くこともある (Mustafaeva, 1995:39-40, Xalikov, 1997:164)。(17)がその例である。

- (17) Dolde-gi irga ššw-ele-b-in
 あの女性.LAT1-も 順番.ABS 着く-PRT.FUT-NH-in
 「あの女性にも順番が来ます。」 [RG-G, p.352]

動詞の定形にも-inが付くことがあるが、この場合は、先にも挙げた引用標識であり、この引用標識は疑問文で使われている形容詞的分詞形にも付くことがあるが、(17)のような例では、引用標識ではなく、何らかを強調する役割で使われている。

焦点を表すのに、-(j)inの代わりに、存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」の定形が使われていることもある。現在形AM-ugo, 過去形AM-uk'-ana, 過去形AM-ugoan, 伝聞過去形AM-uk'-un AM-ugoが観察される。(18)がその例である²。

- (18) Hedinidal b-uk'-ana Ğadamaz hesda
 そうなので NH-ある-PST 人.PL.ERG 彼.LOC2
 rak'alde kkarabššinab hiq'-ule-b b-uk'-ara-b,
 思いついた全ての.ABS 尋ねる-PRT.GNL-NH NH-ある-PRT.PST-NH
 「人々が彼に思いついた全てのことを尋ねていたのはそのような理由からだ。」 [ShM2-K, p.173]

(18)では、焦点となる単語hedinidal「そうなので」の直後に過去形のAM-uk'-anaが置かれていて、述語動詞は過去時制の形容詞的分詞形をしている。焦点を表すのに存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」が使われることは、-(j)inの使用に比べて、圧倒的に少ない。焦点となる単語の直後に存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」が置かれている場合、-(j)inの場合と同様に、述語動詞は一般的に形容詞的分詞形になる。ちなみに、-(j)inとは違い、形容詞的

² 一般時制の形容詞的分詞形と存在動詞AM-uk'-ine「ある、いる」の複合で進行相を表す。

分詞形の述語動詞に存在動詞AM-uk'-ine「ある，いる」が後続して，何らかの強調を表すことはない。

焦点となる単語の直後に動詞AM-at-ize「見つける」の未来時制形あるいはAM-at-izeの不定形が動詞AM-eh-ize「～するかもしれない，～する可能性がある」やkk-eze「～しなければならない」の現在形に埋め込まれた複合体が置かれ，述語動詞が形容詞的分詞形で現れることがある。この場合，文全体に「～しただろう／～するだろう」などのモーダルな意味が加わる。具体的には，AM-at-izeの未来形(a)AM-at-ilaおよび(b)AM-at-ize AM-ugoは「～だろう」という意味になり，AM-eh-izeの現在形に埋め込まれた(c)AM-at-tize beh-ulaは「～かもしれない」，kk-ezeの現在形に埋め込まれた(d)AM-ati-ze kk-olaは「～に違いない」という意味になる。次の(19)では，焦点となる単語hedinidal「そうなので」の直後にAM-at-izeの未来形が置かれていて，述語動詞は過去時制の形容詞的分詞形をしている³。

- (19) Hedinidal r-atila řadamal r-ox-un r-uk'-ra-l.
 そうなので PL-だろう 人.PL.ABS PL-喜ぶ-PCONV PL-PRT.PST-PL
 「人々が喜んでいたのでそのような理由からであろう。」[MP1-S, p.93]

(a)-(d)は，(20)のように，述語動詞の直後に置かれることもある。

- (20) Hab mebel'-gi hes ř-ura-b b-atila řahbarie
 この家具.ABS-も 彼.ERG 与える-PRT.PST-NH NH-だろう Zhaxbar.DAT
 「この家具も彼がZhaxbarにくれたのだろう。」[MM-G, p.223]

(20)は過去時制の形容詞的分詞形の動詞の直後に(a)AM-at-ilaが現れている。
 (20)のような文では，統語的に，(a)AM-at-ilaがモーダルな助動詞として使わ

³ 完了副動詞と存在動詞AM-uk'-ine「ある，いる」の複合で結果相を表す。

れていると一般的には考えられる (Mallaeva, 2000:172-173, Bashirova, 2008:60)。そこで問題になるのは, (19)のように(a)-(d)が叙述の焦点となる単語の直後に置かれていて, 形容詞的分詞形の述語動詞と離れている文の統語的な構造である。アバール語では, 本動詞と助動詞や埋め込まれている動詞と埋め込んでいる動詞が離れていることがある。そのため, (19)のような文であっても, 形容詞的分詞形をしている動詞が(a)AM-at-ilaなどのモーダルな助動詞に埋め込まれていると考えることは可能である。もちろん, (18)のように存在動詞AM-uk'-ineが焦点となっている単語の直後にある文と同様に, (19)のような文でも, (a)-(d)の要素が形容詞的分詞形の動詞と独立して存在すると考えることも可能である。現時点では, どちらの考え方が適切であるかは判断できない。

3. 従属節

主節以外での形容詞的分詞形の使用となると, 一般時制の形容詞的分詞形と存在動詞AM-uk'-ineの組み合わせで進行相を表すことからの発展であると思われるが, AM-iç-ize「見る, 見える」, raç-ize「聞く, 聞こえる」に一般時制の形容詞的分詞形を埋め込んで, この形容詞的分詞形は「～しているのを」という意味で使われる。ここには明らかに進行の意味が含まれているし, 一般時制以外の時制の形容詞的分詞形は使われないので, 本稿で議論してきた形容詞的分詞形の使われ方とはかなり違うので議論の対象から外すことにする。

純粋な従属節で形容詞的分詞が使われることがある。-hidalを使った原因, 理由を表す従属節である。-hidalは述語動詞に付いたり, それ以外の単語に付いたりする。-hidalが述語動詞に付いている場合は当たり前であるが, それ以外の単語に付いている場合も, -hidalが含まれる節全体が「～なので」を表す(Bokarev, 1949:274, Samedov, 1996:210)。ただし, 唯一の例外があり, hedinhidalは, hedin「そのように」に-hidalが付いているが, hedinhidalが含

まれる節全体が、別の節に対する原因、理由を表すのではなく、hedinfidalが「そのような原因、理由で」を意味し、hedinfidalが含まれている節に対して、前節がその原因、理由になる。次の(21)では、動作主を表す能格形の名詞に-hidalが付いている。

- (21) Ebelaf-hidal mun ha-w-ura-w,
 母.ERG-hidal あなた.ABS 生む-M-PRT.PST-M
 「あなたを生んだのは母だから」 [ShM2-K, p.82]

-hidalが述語動詞以外に付いている場合、その名詞が叙述の焦点となっていて、述語動詞は形容詞的分詞形となる。

先に述べたように、-hidalが述語動詞についている場合もあるが、その場合も、述語動詞は形容詞的分詞形になる。(22)がその例である。

- (22) Hew kk-ole-w-hidal-xa dir maduhal-tun.
 彼.ABS (～で)ある-PRT.GNL-M-hidal-EM 私.GEN 隣人.ABS-で
 「彼は私の隣人であるから」 [MP2-K, p.248]

-hidalと並行的に、部分否定を伴う原因、理由を表す従属節でも述語に形容詞的分詞形が使われる。上で、主節で部分否定を表すguroについて述べたが、それから作られたgurefulがある。gurefulは部分否定と原因、理由を表す要素が融合した単語で、「～は～ではないので」を意味する。(23)がその例である。

- (23) Niñ hanire žaq'a gureful r-ak'ar-ara-l..
 私達.ABS ここへ 今 gureful PL-集まる-PRT.PST-PL
 「私達がここへ集まったのは今ではないから」 [SM-L, p.123]

gurefulは原因、理由を表す従属節の中で、部分否定される単語の直後に置

かれて、その従属節の述語動詞は形容詞的分詞形になる。上で、部分否定で使われるguroが述語動詞の直後に置かれることがないことを述べたが、gurelumも同様に述語動詞の直後に現れることはない。

4. おわりに

アバール語において、述語動詞が接辞などを伴わない裸の形容詞的分詞形で現れるのはどのような環境においてであるかについて述べてきた。疑問詞を伴う疑問文以外では、述語動詞以外の単語に疑問なり、部分否定なり、叙述なりの焦点であることを示す要素がその焦点となる単語の直後に置かれている。述語動詞が形容詞的分詞形になるのは、多くの場合、主節においてであるが、原因、理由を表す要素が節の焦点となる単語に後続して、節全体が原因、理由を表す従属節として機能している場合もある。疑問詞を含む疑問文では、疑問詞が疑問文の焦点となっているので、本論文で述べてきた述語動詞が形容詞的分詞形になる環境は、全て、述語動詞以外に何らかの焦点が置かれている環境と言うことになる。本論文で挙げた以外の要素が焦点となる単語に後続して、述語動詞が形容詞的分詞形になることがあるかもしれない。そうした要素のさらなる調査は必要である。

例文で使ったアバール語の文献とのその略号

- [DJu-A] Dadaew, Jusup, Ahul goh — dir rek'el buhi. Makhachkala: Jupiter, 1998.
 [DG-D] Daganow, Şabdula, Şadamal — dir c'wabi. Makhachkala, 1997.
 [HH-I] Hażiew, Husen, Imam Hamzat. Makhachkala, 1995.
 [MM-G] Muhamadow, Musa, Goro-c'er balelde cebe. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1991.
 [MP1-S] Murtazaliewa, Pat'imat, Surat. Makhachkala: Daguchpedgiz, 1990.
 [MP2-K] Murtazaliewa, Pat'imat, Kulakasul jas. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1995.
 [RG-G] Rasulow, Şarip, Şadamalgi raŞadalgı. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1996.

- [SM-L] Sulimanow, Muhamad, Labgo q'isa. Makhachkala: Dagestanskoe knizhnoe izdatel'stvo, 1958.
- [ShM1-C] Šamxalow, Muhamad, C'udul was. Makhachkala: Daguchpedgiz, 1982.
- [ShM2-K] Šamxalow, Muhamad, Q'isabi wa xarbal. Makhachkala, 2002.

参照文献

- Aduxova, È. Z. (2011) Strukturnye tipy prostogo predlozhenija v avarskom jazyke: v sopostavlenii s nemetskim i anglijskim jazykami. Kandidatskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Alekseev, M. E., Ataev, B. M. (1998) Avarskij jazyk. Moscow: Academia.
- Aligadzheva, A. R. (2008) Leksiko-grammaticeskaja organizatsija i sintaksicheskie funkții prichastij avarskogo i nemetskogo jazykov. Kandidatskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Bashirova, R. S. (2008) Analiticheskie konstruktsii glagola avarskogo literaturnogo jazyka. Kandidatskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Bokarev, A. A. (1949) Sintaksis avarskogo jazyka. Moscow-Leningrad: Izdatel'stvo AN SSSR.
- Dzhamaludinova, S. M. (2010) Strukturno-semanticheskij i funkcional'nyj analiz prichastij i deeprichastij avarskogo jazyka v sopostavlenii s sootvetstvujushchimi edinitsami anglijskogo jazyka. Kandidatskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Madieva, G. I. (1981) Morfologija avarskogo literaturnogo jazyka. Makhachkala: Daguchpedgiz.
- Mallaeva, Z. M. (2000) Vido-vremennaja sistema glagola avarskogo literaturnogo jazyka. Doktorskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN. Makhachkala.
- Mallaeva, Z. M. (2002) Grammaticheskie kategorii avarskogo jazyka (modal'nost', zalogovost'). Makhachkala: Jupiter.
- Mallaeva, Z. M. (2007) Glagol avarskogo jazyka: Struktura, semantika, funktsii. Makhachkala: Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN.
- Mustafaeva, R. A. (1995) Otglagol'nye obrazzvanija v avarskom jazyke (formoobrazovanie i upotreblenie). Kandidatskaja dissertatsija. Dagestanskij Gosudarstvennyj Universitet. Makhachkala.
- Nurmagomedov, M. M. (1992) Morfologicheskaja struktura glagola v avarskom jazyke. Kandidatskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN.
- Saidov, M. (1967) Avarsko-russkij slovar'. Moscow: Sovetskaja Èntsiklopedija.
- Samedov, D. S. (1996) Slozhnoe predlozhenie v avarskom jazyke v sopostavlenii s russkim. Doktorskaja dissertatsija. Dagestanskij Gosudarstvennyj Universitet. Makhachkala.

- Surxaeva, S. A. (2007) Sluzhebnye chasti rechi v avarskom jazyke. Kandidatskaja dissertatsija. Institut Jazyka, Literatury i Iskusstva DNTs RAN.
- Xalikov, M. M. (1997) Osnovy stilistiki sovremennogo avarskogo jazyka. Doktorskaja dissertatsija. Dagestanskij Gosudarstvennyj Universitet. Makhachkala.